

わくらは : 和歌 : 文苑

著者	鳳章
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 3
ページ	4 0 - 4 1
発行年	1905-11-03
URL	http://hdl.handle.net/2298/5863

かきる涙のしげくのみ
云ひもかねたるわかしさや

吾れの思ひの種子も亦、
花を夢みて甲斐はあらじよ

さなり乾ける君の胸

和歌

わくらは

鳳章

思ひ出の夕冷たき野の水や地の靈今を秋とささやぐ。
あこがれの聖は高く山に立ちて審判の歌に下界は醒めぬ。
野桔梗の露に亡骸を匂はせて小さきを誇る秋の花守。
新らしき光は永久の生命ぞと劍の子等に幸あらしめよ。
偽りの子はそと觸れぬほほ笑みぬ詩の大甕今破れたり。
落日や神話に似たる大海はそぶるの興と高鳴りそめぬ。
戦に勝鬨ありて平和に偽なくば我が歌ならむ。
相寄りてもものも問ひ得ず秋風は鬢のほつれと白髪と吹きぬ。
曉を啓示得しかの歌載せて森の清水はささやぎやます。

柩守りて一夜歌なき寂寞まひしきを父に肖ぬ子はたゞ夢のごと。(父の死によめる)

低唱

錦 浦 生

百合が香に甕はつゝめ夢の世を夕戸のやみに神むつまじき
美しくしう伊勢路の夏を飾るべく戀幸のせて降りけん百合
あふされどされごと云ひてやまんにはあまりにあつし胸の血潮の
碧瑠璃の空をゆめ路の星もとべ人の小唄に我れ笛とりぬ
聖僧が姫に戀すと古への戯作うれしき清水や寺
薫じては几帳ゆらめく高殿の觀月の宴を人と相ひ見る
染紙に人なつかしき肥後の秋を心みだるゝ萩の葉の風
秋を侘びて蟋蟀なくと草の戸よ二年み手のやつれしよ君
永久にかへりまさじか俤のみ墓になきて不二を見し哉 (櫻牛の墓にて)

俳句

紫溟吟社運座席上吟

七夕の色紙たばろに朝の霧
水によき都なりけり星祭

七夕

蓑 虫

歌百首汨羅に星を祭りけり

敗荷

蓑虫の垂るゝ樓や返り咲き

霧泉人